

熱海市内伊豆石丁場遺跡 確認調査報告書Ⅱ

2015年3月

熱海市教育委員会

序

熱海は美しい自然景観と温暖な気候、そしてなによりも天与の温泉に恵まれて、いにしえより多くの文人墨客が訪れ、日本の歴史の中で少なからぬ役割を果たしてきました。

この熱海をとりまく伊豆箱根地域は良質な石材の産地でもあり、豊富な石材は武家の都である鎌倉や江戸の都市基盤を形づくる役割も果たしました。

特に日本史上最大の城郭である江戸城の石垣のほとんどが伊豆半島から運ばれたと考えられ、伊豆石丁場遺跡は西相模から伊豆半島に広がる、全国にも稀な大きさを誇る遺跡です。

熱海市では平成18年度より石丁場遺跡の保存のための分布調査を始め、平成21年度には『熱海市内石丁場遺跡調査報告書』を刊行し、今回の報告はその続編となります。

近年、全国各地でこうした採石遺跡についての調査研究が日進月歩で急速に進んでおりますが、正直申し上げて本報告はそれらに比肩するような調査を行なったとは言いがたい内容であります。

それでも、内容の不十分な点を認めて、次への糧にしていくことによって、僅かずつでも石丁場遺跡を守り伝える取り組みに向けて、市民と協働して歩んでいきたいと考えております。

前回の序にもありますが「中張窪石丁場遺跡を保存する会」などの市民団体の働きかけがあり、この調査の原点に遺跡保存への市民の強い思いがあるということは重要なことだと思えます。

石丁場遺跡をはじめとする埋蔵文化財はわが国の長い歴史の中で守り伝えられてきた国民の財産であり、将来の文化発展の基礎となるものです。

守り伝えてきた人の思いを力に変えて、立ち止まることなく、文化発展の基礎という可能性の襷（たすき）を未来に繋いで行くため、たとえ遅々であっても前に進み続けたいと思います。

最後となりましたが、調査の実施にあたり、格別なるご指導をいただきました文化庁文化財部記念物課、静岡県教育委員会文化財保護課をはじめ、調査のご指導をいただいた先生方、さらには格段のご尽力を賜りました関係者の皆様に対しまして深く感謝するとともに、厚くお礼申し上げます。

平成27年3月31日

熱海市教育委員会
教育長 三田光行

例 言

1. 本書は、熱海市教育委員会が実施した熱海市内に所在する伊豆石丁場遺跡の分布・確認調査報告書である。
2. 本書は石丁場遺跡（採石跡）の内容確認を目的とし、文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金、静岡県より文化財保存費補助金を受けて刊行した。
3. 本書の執筆・編集は栗木崇が行った。
4. 緊急雇用創出事業による分布調査と遺構分布図作成業務を有限会社パル文化財研究所に、調査測量基準点設置業務を株式会社フジヤマに委託して実施した。
5. 掲載した写真は有限会社パル文化財研究所、栗木崇が撮影し、一部に伊東市教育委員会、株式会社フジヤマ、荻島浩太氏より提供を受けた。
6. 本調査の実施から報告書の刊行に至る過程で、次の方々および機関より御指導、御教示、御協力を賜っている。記して感謝の意を表したい（50音順、敬称略）。

浅野啓介 浅野晴樹 池谷初恵 磯野浩司 市川浩文 伊藤宏之 内川隆志 近江俊秀 大澤研一
大西雅也 大庭康時 大八木謙司 小野正敏 小和田哲男 柏本秋生 梶原勝 加藤理文 鴨志田聡
金子浩之 河合修 川口武彦 菊池吉伸 木越隆三 北垣聰一郎 後藤宏樹 齋藤慎一 坂井秀弥
坂誥秀一 坂本俊 佐々木健策 笹原千賀子 佐藤亜星 佐藤正知 白峰旬 杉山宏生 鈴木裕篤
鈴木康之 関周一 高橋一樹 高橋好信 谷口肇 辻川哲朗 坪根伸也 富田和気夫 中島圭一
西田郁乃 西山昌孝 禰宜田佳男 野口達郎 橋本敬之 原田昭一 原田雄紀 福島金治 藤川祐作
細田隆博 本間岳人 枅田豊美 松田睦彦 三瓶裕司 溝口彰啓 村上利雄 村上安直 村木二郎
桃崎祐輔 森岡秀人 山口剛志 山口博之 山下信一郎 山下浩之
網代温泉観光協会 芦屋市教育委員会 石川県金沢城調査研究所 伊東市教育委員会 伊奈石の会
MOA美術館 近江八幡市立資料館 大分市教育委員会 小田原市教育委員会 滋賀県文化財保護協会
静岡県埋蔵文化財調査研究所 豆州江戸城石丁場遺跡保存・活用ネットワーク 高砂市教育委員会
高松市石の民俗資料館 中張窪石丁場遺跡を保存する会 沼津市教育委員会

7. 本調査に関わる記録類はすべて熱海市教育委員会にて保管し活用を図るものとする。

凡 例

1. 本書に記載した方位は真北を基準とし、座標は世界測地系に依拠しており、標高は東京湾平均海面を基準とする。
2. 旧国名「伊豆国」は伊豆半島及び島嶼で構成されるが、本稿では便宜上、島嶼部を除いた箱根から南の伊豆半島を「伊豆地域」と呼称し、当該地域では、江戸時代より伝統的に採石場を石丁場と呼称していたことから、伊豆石丁場遺跡とは伊豆地域の採石遺跡とする。
3. 本報告書内の各用語について、矢穴とは石材を割るために掘られた「矢」を差し込むための穴であり、矢穴が掘られた石を矢穴石と呼び、記号や文字が刻まれた石を刻印石と呼ぶ。また文字の刻まれた刻印石の中で大名家にかかわる人名が同定できたものを人名刻印とする。

目 次

第Ⅰ章 調査目的と経緯・経過	1
1節 調査の目的	1
2節 調査経緯	1
3節 調査経過	2
第Ⅱ章 分布調査	5
1. 稲村	7
2. 礼拝堂	9
3. 土沢山	11
4. 白子・地獄沢	13
5. 弁慶嵐	17
6. 日陰山・船洞	17
7. 南ヶ洞・湯ヶ洞	19
8. 朝日山（網代石丁場B遺跡群）	21
第Ⅲ章 中張窪・瘤木石丁場詳細分布調査	23
第Ⅳ章 総括－調査成果と今後の展望－	27
1節 調査の成果	27
2節 今後の展望	27

表目次

表1 熱海市内石丁場遺跡群	5
表2 中張窪・瘤木遺跡刻印一覧	24
表3 熱海市内石丁場遺跡群刻印一覧	29
表4 熱海市内石丁場遺跡評価	30

図版目次

第1図 熱海市内石丁場群 位置図	6
第2図 稲村石丁場 分布図	8
第3図 礼拝堂石丁場 分布図	10
第4図 土沢山石丁場 分布図	12
第5図 白子・地獄沢石丁場 分布図	16
第6図 弁慶嵐石丁場/日陰山・船洞石丁場 分布図	18
第7図 南ヶ洞・湯ヶ洞石丁場 分布図	20
第8図 朝日山石丁場 分布図	22
第9図 中張窪・瘤木石丁場遺跡 採石坑・刻印・矢穴石分布図	25

第 I 章 調査目的と経緯・経過

1 節 調査の目的

伊豆石とは文字通り伊豆地方で産出する石材の意味であるが、火山半島である伊豆半島からは様々な石材が産出された。そのため「伊豆石」という言葉が表す石は一様ではなく、硬質な安山岩系の石材も軟質な凝灰岩系の石材も「伊豆石」と呼ばれる。また地質的にはフィリピン海プレートに乗る伊豆地塊として伊豆半島は箱根や真鶴といった西相模と同一グループで、伊豆石は「相州石」「小松石」の別称として理解をされることもあり、その多様性、歴史の深さゆえ、混乱している（加藤1994）。

ここで西相模から伊豆半島の安山岩石材の特徴を簡単に述べると、まず鎌倉時代まで遡る伝統的な広域流通の石材ということがあげられる。石塔などは各地の石造物のモデルとなる高級石材であり、石垣などの建築・土木資材としても東国の各地に供給され、東国の石造文化の主導的な役割を果たしたと考えられる。

江戸城の公儀普請における採石地となった石丁場遺跡の特徴としては、西相模から伊豆半島に広がる大規模な遺跡群であること、刻印と呼ばれる石材に刻まれた印が多種多様に確認され、しかも文字刻印が多く、内容も大名家の人名やその石丁場の範囲、紀年銘など具体的であること、比較的文献資料や絵画資料が残されていることなどがあげられる。

しかしながらその重要性や資料の豊富さに比して、その生産と流通の実態は十分明らかにされてこなかった。特に当該地域の石材が中世の鎌倉、近世の江戸といった東国の首都を支えた石材であることを考えれば、その歴史的意味は西相模・伊豆という地域史の問題に留まらず日本の歴史全体とも大きく関わっており、日本列島の歴史の中に位置付けられることによってはじめて正しい評価が得られるものと思われる。

こうした西相模から伊豆の採石生産及び流通の実態解明は重要であるという認識のもとに、学際的で科学的な総合調査を長期にわたって地道に着実に継続していく必要がある。

2 節 調査経緯

熱海市内の石丁場遺跡の研究は昭和30年ごろから、文献史学、城郭研究者によって先鞭がつけられ、昭和40年頃からの田畑實作氏の熱海・伊東の現地踏査が契機となって地元の郷土史家に影響を与えた。

昭和42年（1967）刊行の『熱海市史』上巻でも「江戸城増築と熱海の石材」の一節が設けられ、昭和47年（1972）刊行の資料編には関連文書も集録されている。同年に伊東市宇佐美在住の大高吟之助氏によって『郷土多賀村史』、昭和49年（1974）に『網代郷土史』が著され、その中には、刻印や採石関連の聞き取りなど、石丁場に関連する内容が数多く記述されている。

昭和50年後半になると、伊東郷土史研究会の鈴木茂氏に多賀地区の小川長平氏、高橋愛子氏、西島宝氏、牧野國男氏らが協力して調査が行われ市内各地で刻印石の発見が相次ぐようになる（鈴木1981）。

そういった中で、昭和56年（1981）に県道82号、下多賀（現熱海）・大仁線の拡幅工事で「羽柴右近」銘の文字刻印が発見されると、下多賀町内会が刻印石保存の嘆願書を提出して保存運動がおこり、国道135号沿いの下多賀園地に移設保存された。この時に「竈木遺跡」として登録され、静岡県内で初めて石丁場遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地となる。また、平成元年（1989）には無形民俗文化財の『下多賀神社水浴せ式』の調査報告に「多賀石の問題」の項が設けられ、木村博氏によって刻印や石工などにつ

いて民俗学的な立場から言及されている。

その後、平成9年には県道82号線拡幅工事のために、初めて伊豆石丁場遺跡の発掘調査が行われた。しかし、開発に伴う緊急調査で目的意識が不十分だったこともあり、従来の研究成果を活かした報告ができず、調査成果自体もあまり注目されることが無かった。

市教育委員会による主体的な調査研究は平成15年に江戸東京博物館の特別展「江戸城」の事前調査のため齋藤慎一氏が熱海市内を含む伊豆石丁場遺跡の踏査を行ったことが嚆矢となり、その重要性を喚起されたことによって遺跡の踏査など関連資料の調査を開始することになった。

一方、下多賀地区では有志が平成14年4月に「中張窪石丁場遺跡を保存する会」を結成し、散策ルートや案内板を設置するなど独自の遺跡保存活動を展開しており、平成17年には同会が「是ヨりにし 有馬玄蕃 石場 慶長十六年 七月廿一日」の紀年銘が刻印されている石材に覆屋を設置して欲しいという要望を市観光部局に提出した。これを受けて市教委では、その取り扱いを含めた石丁場遺跡の調査、保存について静岡県教育委員会をとおして、文化庁記念物課に指導を依頼した。

それによって、平成18年3月に坂井秀弥主任調査官（当時）が伊豆石丁場遺跡を視察することになり、熱海市、伊東市の市長とも会談してその重要性がより認識されることになった。熱海市教育委員会では石丁場遺跡群を適切に調査・保存・活用するための基礎資料を得ることを目的として平成18年度から20年度の間国庫補助事業として調査を行なった。

その結果、分布調査によって27地点の石丁場を確認し、人名を含む約60種の刻印群を発見した。伊豆山地区の礼拝堂石丁場遺跡、多賀地区の中張窪・瘤木石丁場遺跡、網代地区の朝日山石丁場遺跡などでは地形測量、礼拝堂、中張窪・瘤木においてはトレンチによる発掘調査も行ない、中張窪・瘤木遺跡ではB地区の9号採石遺構において鉄鋏、鞆の羽口などの製鉄関連遺物を表採できた。そのほか既存の文献史料の収集と文献と刻印との対応関係の検討や岩石学的な調査・分析に加えて、伊豆山地区の般若院、寺山遺跡の石塔調査を行なっている（熱海市教育委員会2009）。

また伊豆石丁場遺跡群は静岡県・神奈川県と広域にわたる遺跡であることから調査、保存について調整を図る必要があり、「伊豆東海岸石丁場遺跡連絡協議会」などで継続的な協議を行なうとともに学識経験者から意見を聞く「熱海市内石丁場遺跡調査研究検討会」を2回開き、平成20年10月8日には「伊豆石丁場遺跡調査整備委員会準備会」を開催した。その他、普及活動として平成21年5月の「広報あたま」No.618号に「江戸城を造った伊豆の石―江戸城石丁場遺跡―」の特集記事掲載を掲載している。

今回の報告はその後平成21年度から26年度までの調査成果を報告するものである。文化財担当者による継続的な分布調査や特に平成21年度に緊急雇用創出事業によって組織的に行なった分布調査と平成26年度の国庫補助事業として中張窪・瘤木石丁場の測量基準点を設置し、採石坑、刻印などの詳細分布図を作成した成果を本書にまとめて報告した。

3 節 調査経過

平成21年度～26年度間の石丁場遺跡保存目的の調査や協議、普及活動について列記する。

平成21年度

7月14日 静岡地理研究会第45回例会にて県東部の社会科教職員らを案内（中張窪・瘤木）

12月21日～3月26日 緊急雇用創出事業による分布調査

12月25日 第2回伊豆石丁場遺跡調査整備委員会準備会（伊東市役所）

平成22年度

- 4月28日 静岡県・伊東市と今後の調査保存についての協議（静岡県庁）
- 6月17日 初島小学校生徒へ出前授業
- 7月6日 NHK教育テレビ番組「見える歴史～徳川家康～」の中で中張窪・瘤木石丁場の人名刻印が紹介される
- 11月6日 網代温泉観光協会に協力し、「石丁場ウォーク」を開催、参加者約60名
- 3月5日 シンポジウム「江戸の石を切る—伊豆石丁場遺跡から見る近世社会—」を静岡県考古学会と共催（熱海市起雲閣）、参加者約200名

平成23年度

- 11月15日「中張窪石丁場遺跡を保存する会創立10周年記念講演会」にて担当職員が講演

平成24年度

- 12月20日 静岡県・伊東市と今後の調査保存についての協議（熱海市）
- 1月23日 江戸城石垣石切丁場の保存に関する協議（文化庁）

平成25年度

- 5月10日 広報あたまNo.675号に「江戸城を築いた熱海の石～熱海市内石丁場遺跡～」の特集記事掲載
- 6月19日 国立歴史民俗博物館の特別企画展「時代を作った技—中世の生産革命」に中張窪・瘤木石丁場出土遺物と中張窪石丁場遺跡を保存する会の石工道具を出品
- 10月21日 江戸城石垣石切丁場の保存に関する協議（文化庁）
- 1月21日 文化庁調査官（史跡部門）の現地（熱海市・伊東市）視察
- 1月25日 平成25年度図書館講座「熱海の歴史をひもとく」第3回にて「江戸城の石垣と熱海の採石」と題して担当職員が講演
- 3月5日 平成25年度第2回「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会」にて報告（文化庁）

平成26年度

- 6月26日～8月11日 測量基準点設置（中張窪・瘤木）
- 8月8日 伊豆石丁場遺跡国指定に向けての打ち合わせ会（熱海市）
- 9月30日～1月30日 詳細分布調査（中張窪・瘤木）
- 1月22日 第2回伊豆石丁場遺跡国指定に向けての打ち合わせ会（小田原市）
- 3月31日 『熱海市内伊豆石丁場遺跡確認調査報告書Ⅱ』刊行



第2回伊豆石丁場遺跡調査整備委員会準備会



緊急雇用創出事業による分布調査風景



シンポジウム「江戸の石を切る」



初島小学校への出前授業



国立歴史民俗博物館特別企画展へ出品立会い



測量基準点の設置作業

調査・普及活動等風景写真

第II章 分布調査

概 要

静岡県熱海市は神奈川県との県境に位置し、北から泉、伊豆山、熱海、多賀、網代と離島の初島の6地区となるが、各地区より石丁場跡もしくは、文献上で採石の記録が確認できる。そのほとんどが安山岩、玄武岩などの硬質な火山岩であり、一部で軟質な火砕岩（凝灰岩）の石材が産出されている。

分布調査で確認できる普遍的な石丁場の遺構は、石材にノミで掘られた矢穴痕である。文献資料でしか確認できない石丁場を除けば、矢穴痕が遺跡の指標であり、刻印や採掘坑が伴う。

安山岩などの硬質石材は転石の露頭からの採石がほとんどであり、地表面で確認できる転石を割り取って、その過程で見つかった第2、第3の転石を採掘していくことによって、採石遺構はクレーター状の窪地として確認できる。江戸城石垣用のその直径が20mを超える程大規模なものから、近世末以降の間知石を採石した5m規模のもの、径100mを超え地形図で確認できるような近代の採石場まで様々である。石垣用採坑では、踏査では石材周辺に小端材がほとんど確認できないのに対して、間知石が採石された遺構ではフレイク状の小端材が数多く確認される。また、石垣用石材の残石を利用した間知石の採石も各地の石丁場遺跡で確認される。中張窪・瘤木や白子・地獄沢石丁場などの山間の奥地では石垣用石材の採石坑がそのまま残されており、公儀（天下）普請の石垣用石材が山間部まで入って採石を行っていたのに対して、民需である間知石の採石では標高の高い所や急斜面地ではほとんど確認できない。

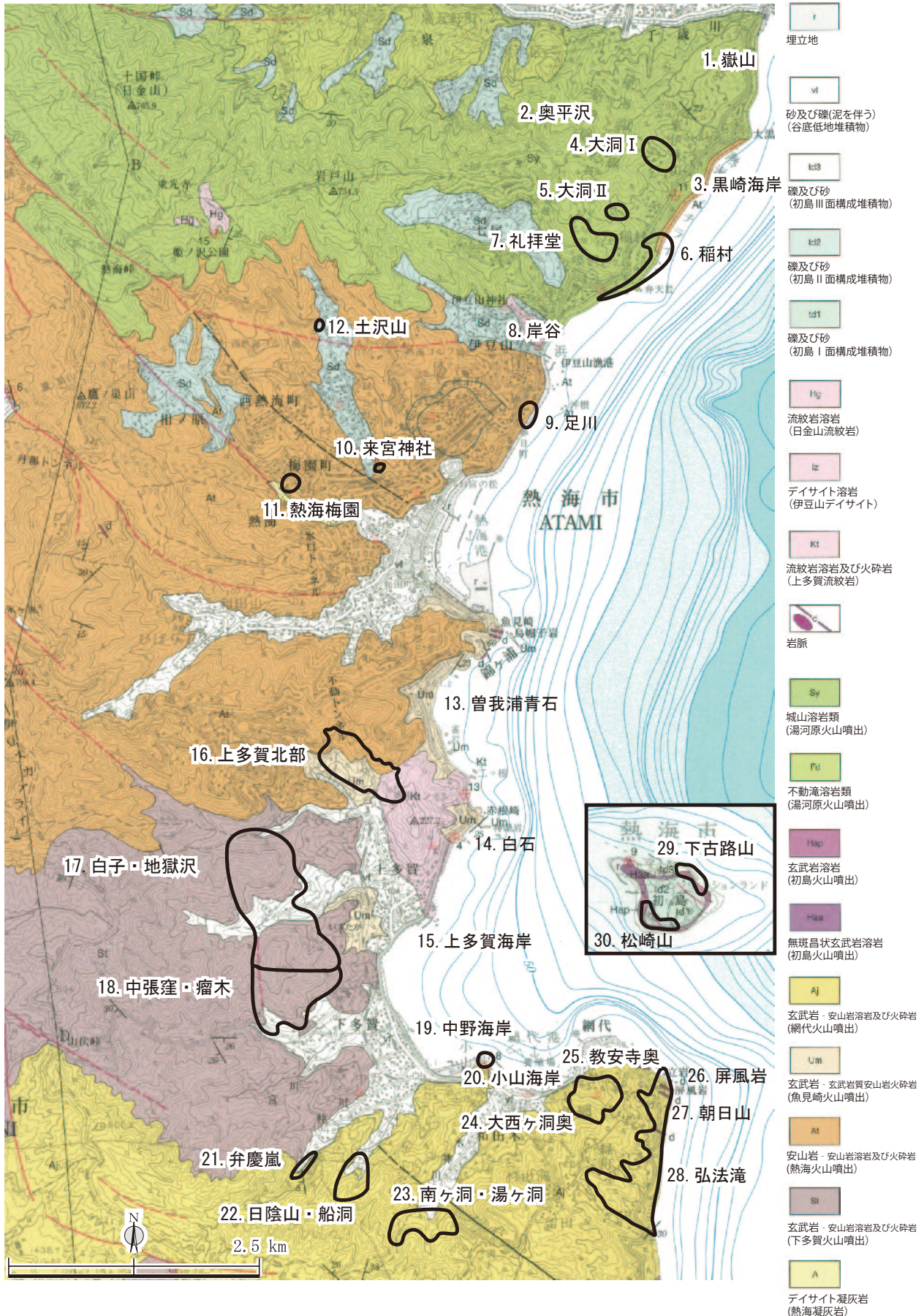
間知石は安政三年（1856）に江戸へ入津した船の積荷書上である『重宝録』に「多賀間地（知）」が項目中の最大数の年間平均105,500本と記録されることから、多賀地区で大量の採石が行なわれたと考えられる。

文献資料との関連でいえば、初島のように文献上、石丁場の記述のない所でも、江戸城の石丁場が確認される一方で『山内文書』『細川家文書』等、文献にある大名家の石丁場と対応しない例が多く確認された。現状で合致すると思われるのは稲村石丁場（京極家）と弘法滝石丁場（大村家）、朝日山（黒田）にとどまる。

軟質な火砕岩系の石材については、確実な近世以前の採石跡は確認できないが、文献史料「寛永八年七月小林重定青石請取状」に「青がんぎ石」とあり、かつて湯ヶ島凝灰岩に分類された青緑色を呈する上多賀曾我浦の火砕岩のことと考えられ、寛永期以前から採石されていた可能性がある。

泉地区	（1 嶽山 2 奥平沢 3 黒崎海岸 4 大洞Ⅰ）
伊豆山地区	（5 大洞Ⅱ 6 稲村 7 礼拝堂 8 岸谷）
熱海地区	（9 足川 10 来宮神社 11 熱海梅園 12 土沢山）
多賀地区	（13 曾我浦 14 白石 15 上多賀海岸 16 上多賀北部 17 白子・地獄沢 18 中張窪・瘤木 19 中野海岸 20 小山海岸 21 弁慶嵐 22 日陰山・船洞 23 南ヶ洞・湯ヶ洞）
網代地区	（24 大西ヶ洞奥 25 教安寺奥 26 屏風岩 27 朝日山 28 弘法滝）
初島地区	（29 下古路山 30 松崎山）

表1 熱海市内石丁場遺跡群



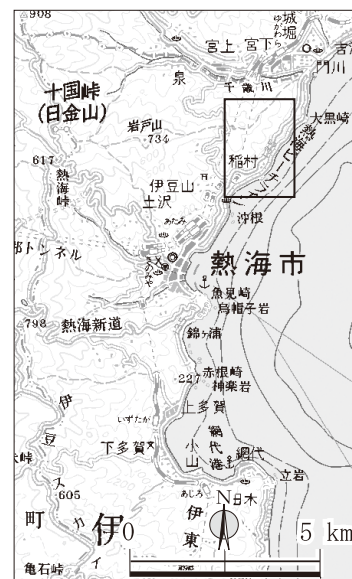
第1図 熱海市内石丁場群 位置図 (産総研地質調査総合センター5万分の1地質図幅「熱海」に加筆)

1. 稲村

稲村石丁場遺跡は伊豆山地区の北東側、稲村集落の海岸部に位置する。沢筋や海岸に矢穴痕や刻印「囗」「田」を有する石材が確認でき、『伊豆石場之覚』では稲村（伊奈村）は京極丹後（寛永六年）の丁場とされており京極家関連の石丁場遺跡であると考えられる。

平成21年度に緊急雇用事業による分布調査によって、さらに刻印を有する石材「囗」を4点、「田」を1点確認した。

また、海岸を600m程北上した泉地区の字黒崎の海岸で矢穴石をいくつか確認した。



稲村 刻印① 遠景



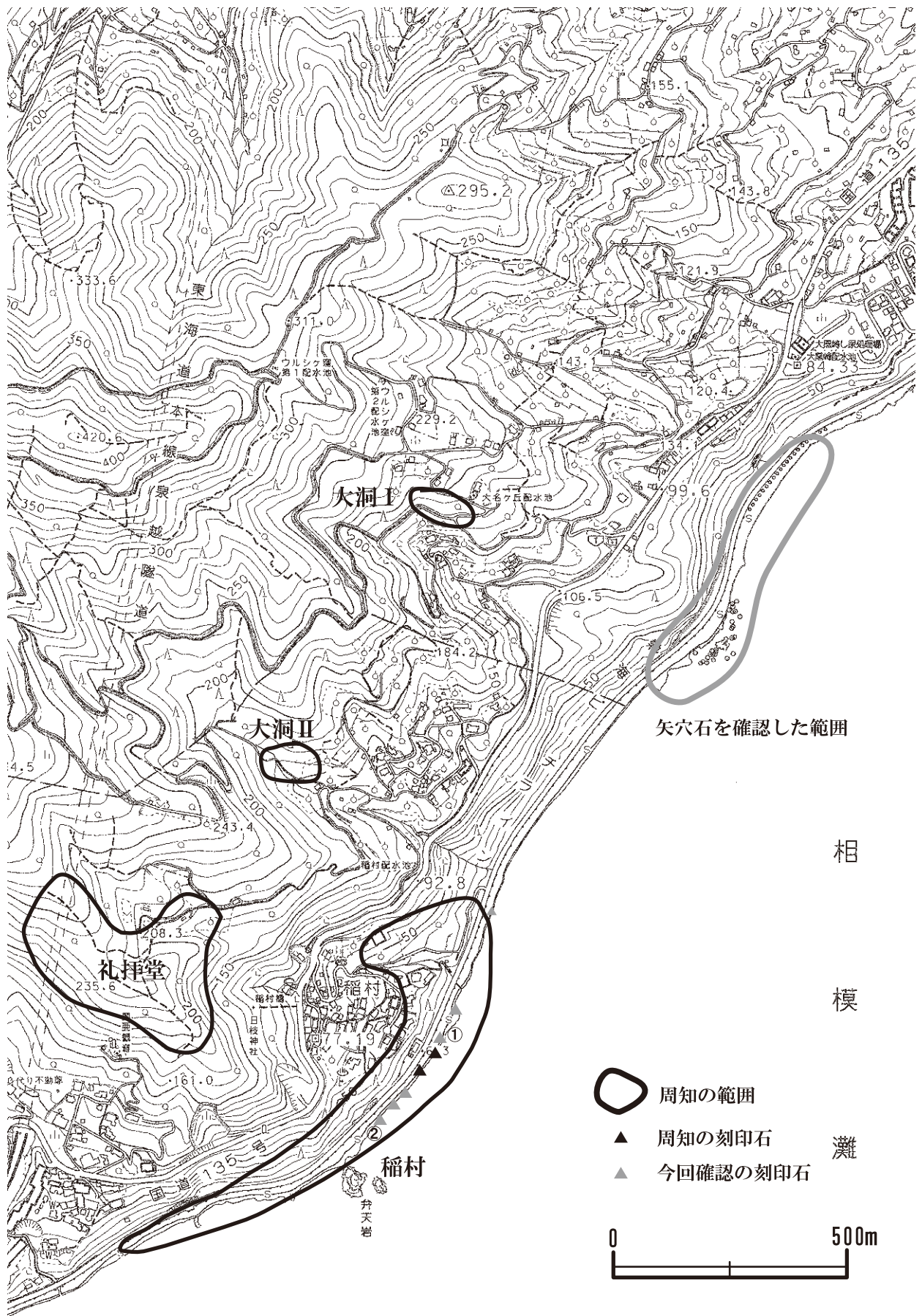
稲村 刻印①



稲村 刻印② 遠景



稲村 矢穴



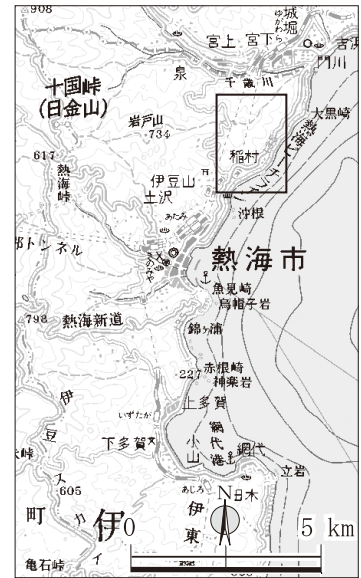
第2図 稲村石丁場 分布図

2. 礼拝堂

礼拝堂石丁場遺跡は伊豆山神社より1 km北東の字名「礼拝堂」周辺の標高約200～260mの斜面地に位置する。礼拝堂の字名は小田原方面より根府川街道（伊豆東浦路）を通過して伊豆権現に参詣する場合、礼拝する場所であることに由来する。

平成20年度の報告では「羽柴丹後守 けい長九年」と判読される人名刻印や京極氏の家紋「罫」や罫が記号化された刻印「罫」のほか「御用」「尨」などを確認した。また、矢穴痕は単独の矢（試し矢）に割付線を彫ったものしか確認できず、試掘調査においても端材等は確認できなかった。

平成21年度に緊急雇用事業による分布調査によって、既知の刻印「罫」を4点、「罫」を6点、「1」2点を追加確認できたとともに、新たに「田」を2点、「⊖」を1点確認した。特に興亜観音東側で確認された①は不整形な石の面にそるえるように刻印が刻まれており、石材の確認的な意味合いであったことが想定される。稲村石丁場との間が、国道、住宅地以外はほぼ急斜面で調査を行っていないが、本来は京極家の丁場として一体として把握できる可能性がある。一方で北西の斜面側で刻印や矢で割った石材が確認されたことにより範囲が西側へ大きく広がった区域については刻印の種類等も異なるため、今後別の石丁場として区別していく可能性がある。



礼拝堂 刻印①



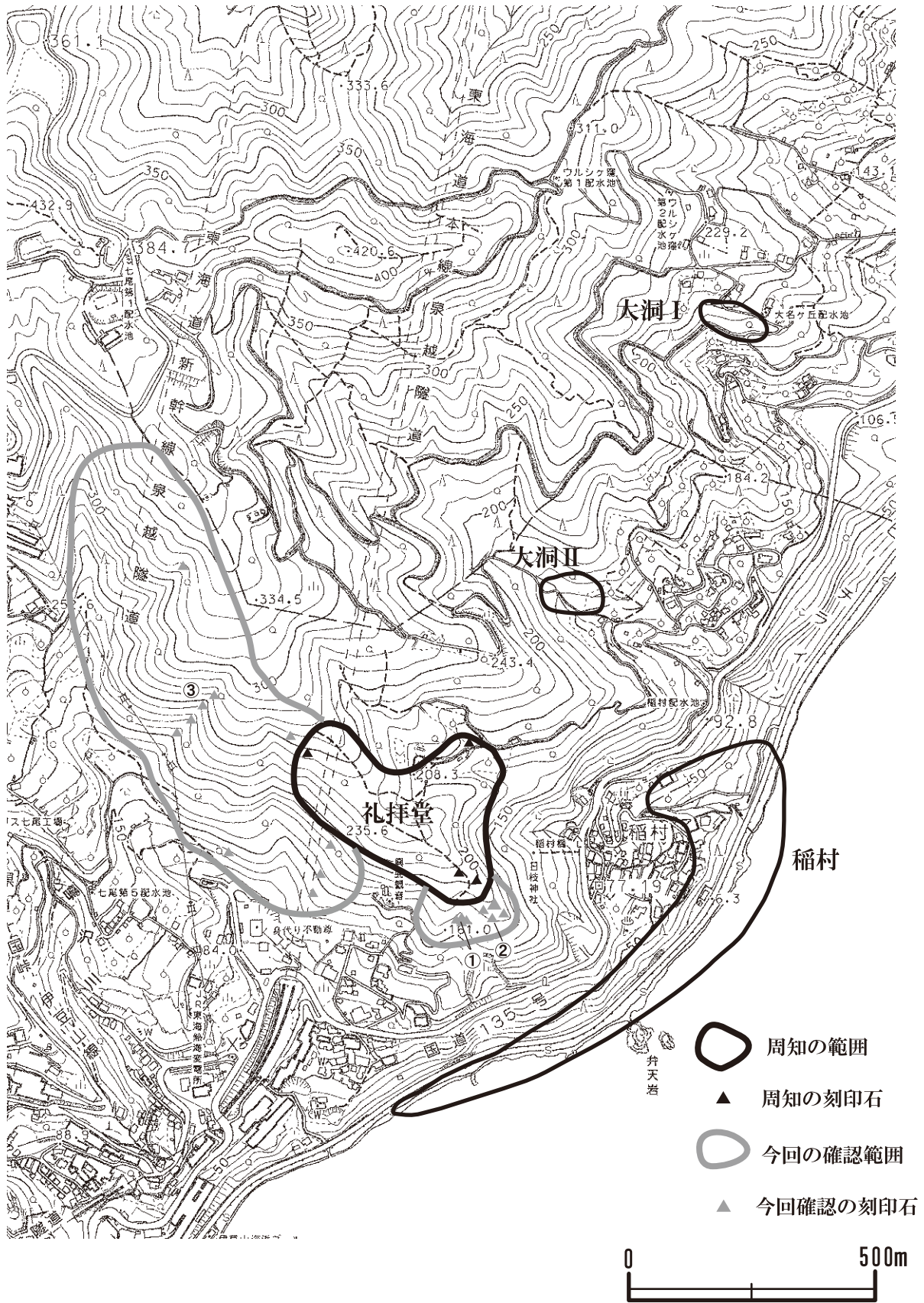
礼拝堂 刻印②



礼拝堂 刻印③



礼拝堂 すだれ状のノミ痕



第3図 礼拝堂石丁場 分布図

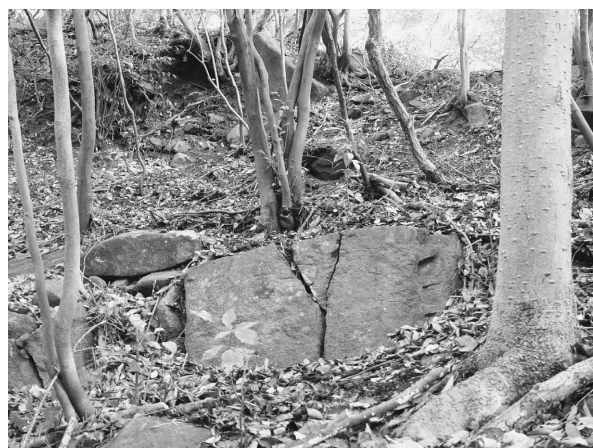
3. 土沢山

土沢山石丁場遺跡はJR来宮駅の北方約1.6km、糸川河口から上流の約2.2kmの糸川左支流、笹良ヶ台配水地の西側の谷奥、標高330m付近に位置する。斜面に径9m×6m程のクレーター状の窪地があり、矢穴痕や刻印「☒」「+」を有する石材がいくつか確認でき、採石坑と考えられる。

現在この採石坑1地点しか確認できないが、熱海地区では石丁場の痕跡を確認することがほとんどできない中で採石の状況が良好に残されていること、内陸で標高が高い点で貴重な遺跡である。



土沢山 採石坑



土沢山 矢穴・刻印 遠景



土沢山 採石坑 近景



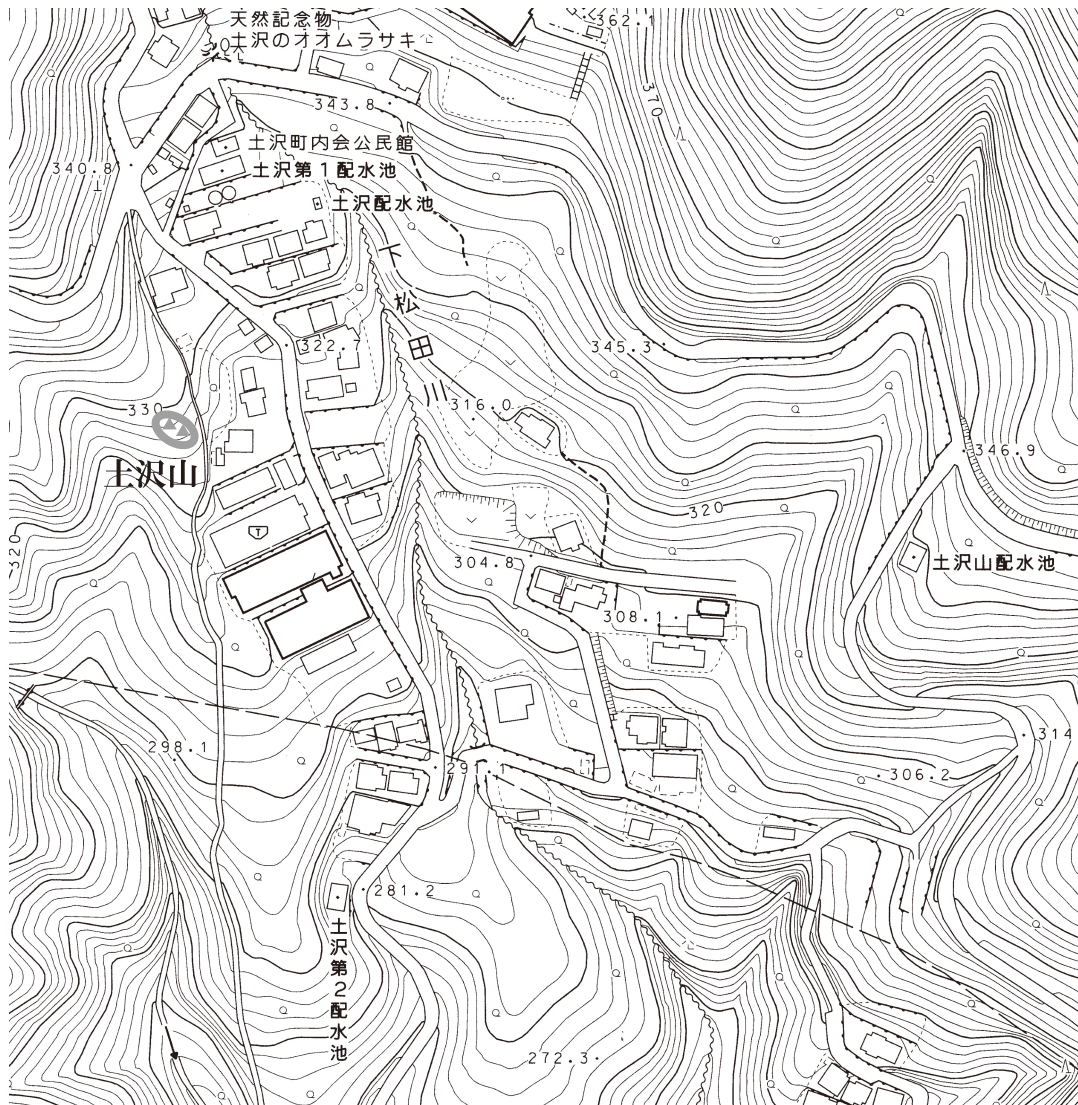
土沢山 矢穴・刻印 近景



土沢山 刻印



土沢山 刻印 近景



- 今回の確認範囲
- ▲ 今回確認の刻印石



第4図 土沢山石丁場 分布図

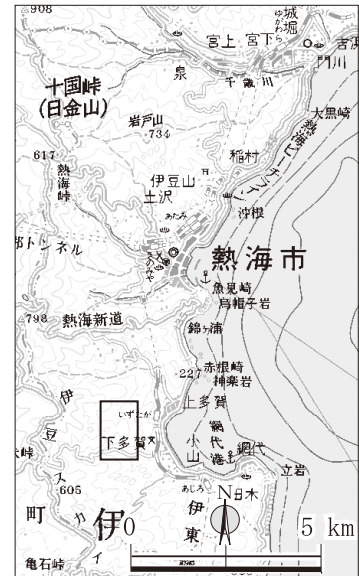
4. 白子・地獄沢

平成20年度の報告ではJR伊豆多賀駅より西方約1.2kmの大川支流の山間部の標高240～290mの斜面地で確認している。

平成21年度の調査で支流を中心に山間部まで広域に広がり、南側は下多賀との大字境となる標高371.2mの山（通称大久保山、中張窪山）で中張窪・瘤木石丁場と接することとなり、熱海市内最大規模の石丁場遺跡となった。両者の境界については大字境となる尾根であり、採石した石材は概ねそれぞれ、上多賀下多賀へ搬出されると考えられるので、大字境を石丁場遺跡の境界として把握している。

刻印を有する石材が散在し、市内でも最多級の30種類を超える刻印が確認されている。中でも「囧」「囧」「囧」が多く確認されること、不定形なものも多い特徴があり、他に「口介」の人名を刻んだ刻印も確認できた。このほか「塚」は、雑木林と植林との境界の斜面に並んで記されており、採石よりも、林業等に関連する刻印である可能性が高い。

『寛永十二年伊豆相模細川忠興組石場覚』の中に「上たかノ内熊かとう」とあって「福島大夫」（慶長～元和）、「尾張」（寛永六年）、の丁場とされるが、下多賀と字境の山頂付近の字名「熊ヶ峠」のことと思われる。



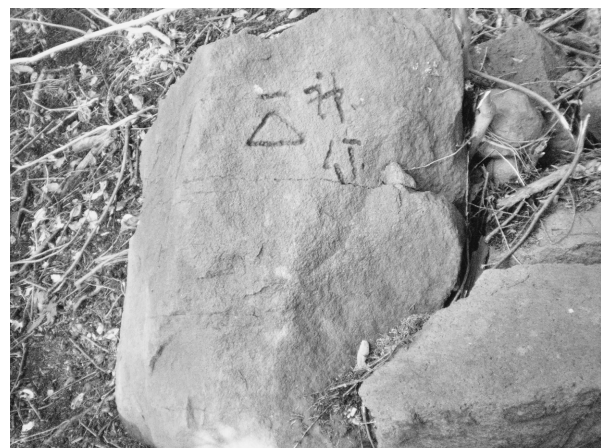
白子・地獄沢 調査風景



白子・地獄沢 調査風景



白子・地獄沢 遠景



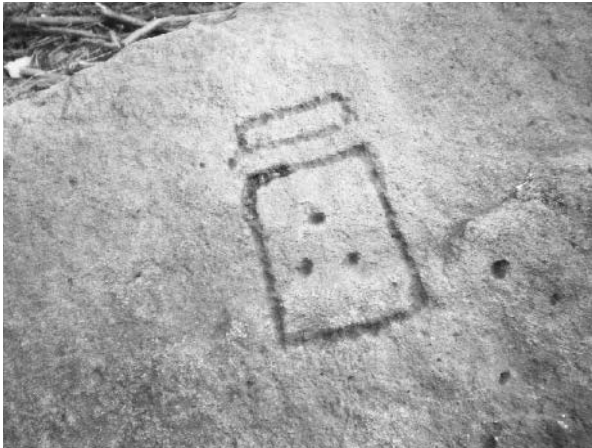
白子・地獄沢 刻印



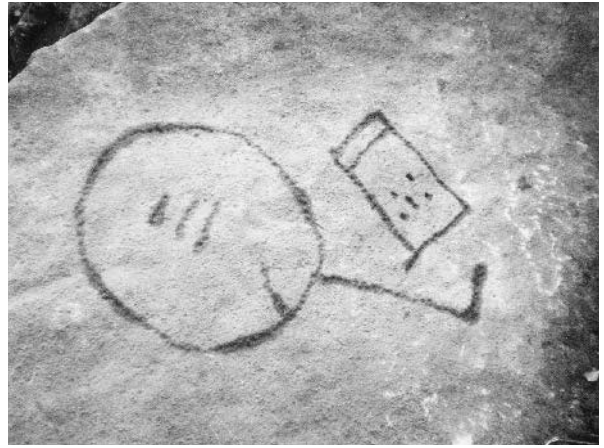
白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



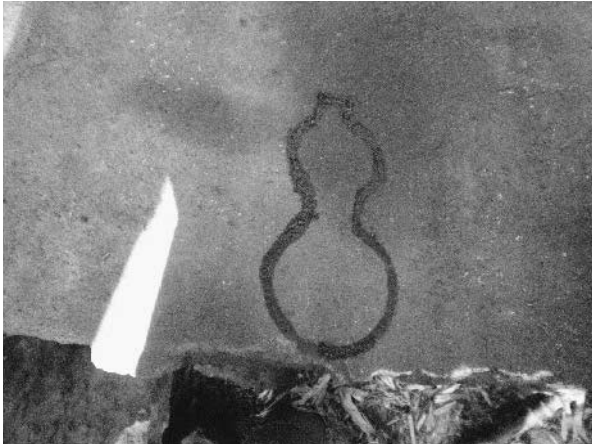
白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



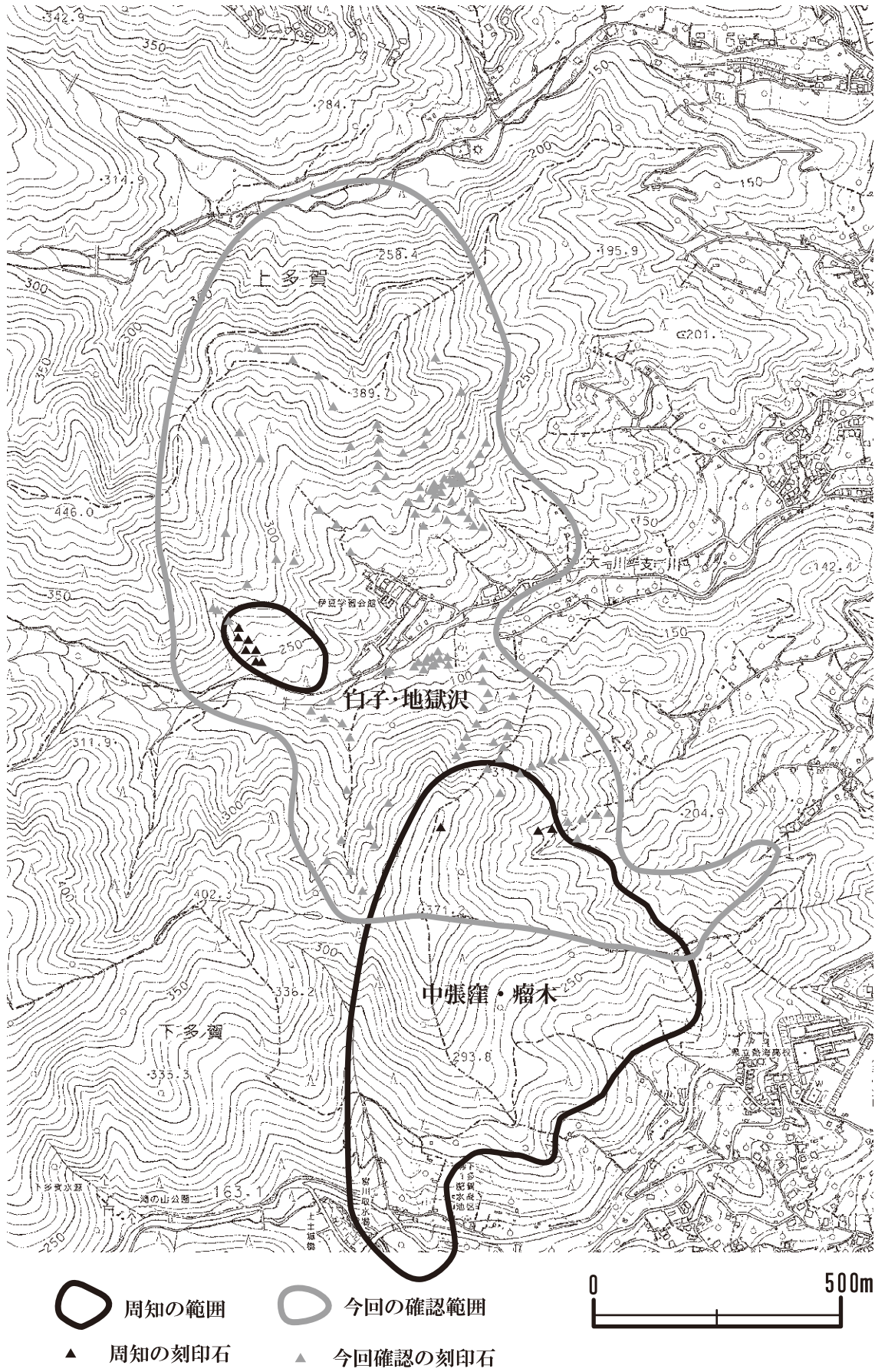
白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



白子・地獄沢 刻印



第5図 白子・地獄沢石丁場 分布図

5. 弁慶嵐 6. 日陰山・船洞

弁慶嵐石丁場遺跡はJR網代駅の西南西約2.1kmの仲川河口から上流の約1.1kmに位置し、林道中野線と隣接する砂防ダム近くの沢に位置する。平成24年1月に砂防事業の開発行為に伴う発掘調査が行なわれ、「○」「ㄥ」「◎」などの刻印や矢穴痕を有する石材が散在していることが確認された。

調査において確認された石材の様相から上流で加工されたものが多く周辺の踏査によっても矢穴の痕跡のある石材等が確認できないことから、上流の砂防ダム建設で石丁場の主体部が消滅したと考えられる（静岡県埋蔵文化財センター2013）。

日陰山・船洞石丁場遺跡はJR網代駅の西南西約1.5kmの鍛冶川河口から約1.1km上流の谷部に位置する。砂防ダムより山手に刻印「㊦」「㊧」「回」「十」などの刻印や矢穴痕を有する石材が散在している。特に送電線付近にある石材①は3m×2mと比較的大きく、「㊦」の刻印が確認できる。



弁慶嵐 刻印①



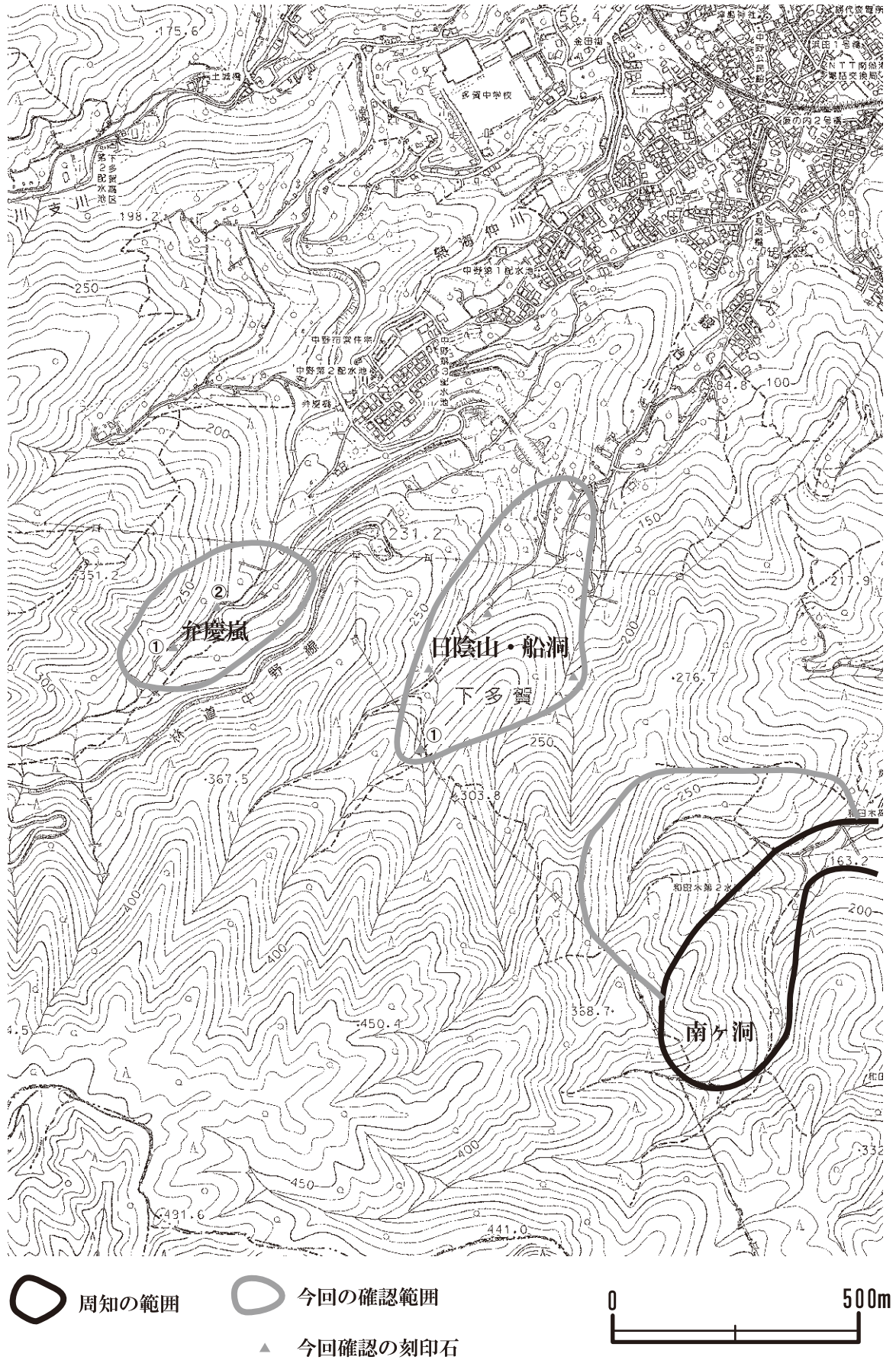
弁慶嵐 刻印②



日陰山・船洞 石材①



日陰山・船洞 刻印①



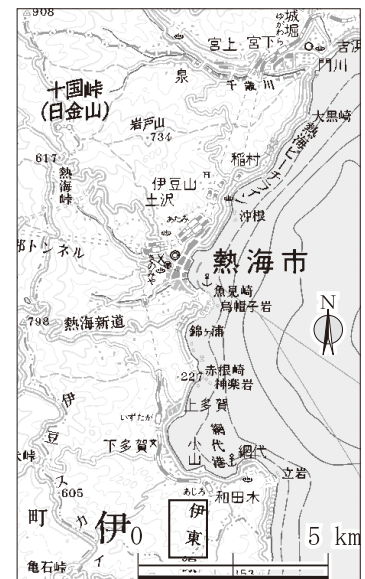
第6図 弁慶嵐堂石丁場/日陰山・船洞石丁場 分布図

7. 南ヶ洞・湯ヶ洞

平成20年度の報告ではJR網代駅の南方1.3kmの水神川上流の斜面地で確認し、「此ノ石ヨリ南西 京極丹後守石場」の人名刻印などを報告している。

平成21年度の調査ではさらに西側の谷などに刻印や矢穴痕を有する石材が確認できた。また、砂防ダムに挟まれた尾根の標高200mあたりに、刻印や矢穴石がまとまって確認できた。

東側の網代南熱海ヶ丘分譲地北東の標高150m～270mの斜面地に矢穴痕を有する石材が散在しているが、未踏査地が多いため、今後再調査をすべき地点の一つである。



南ヶ洞・湯ヶ洞 刻印



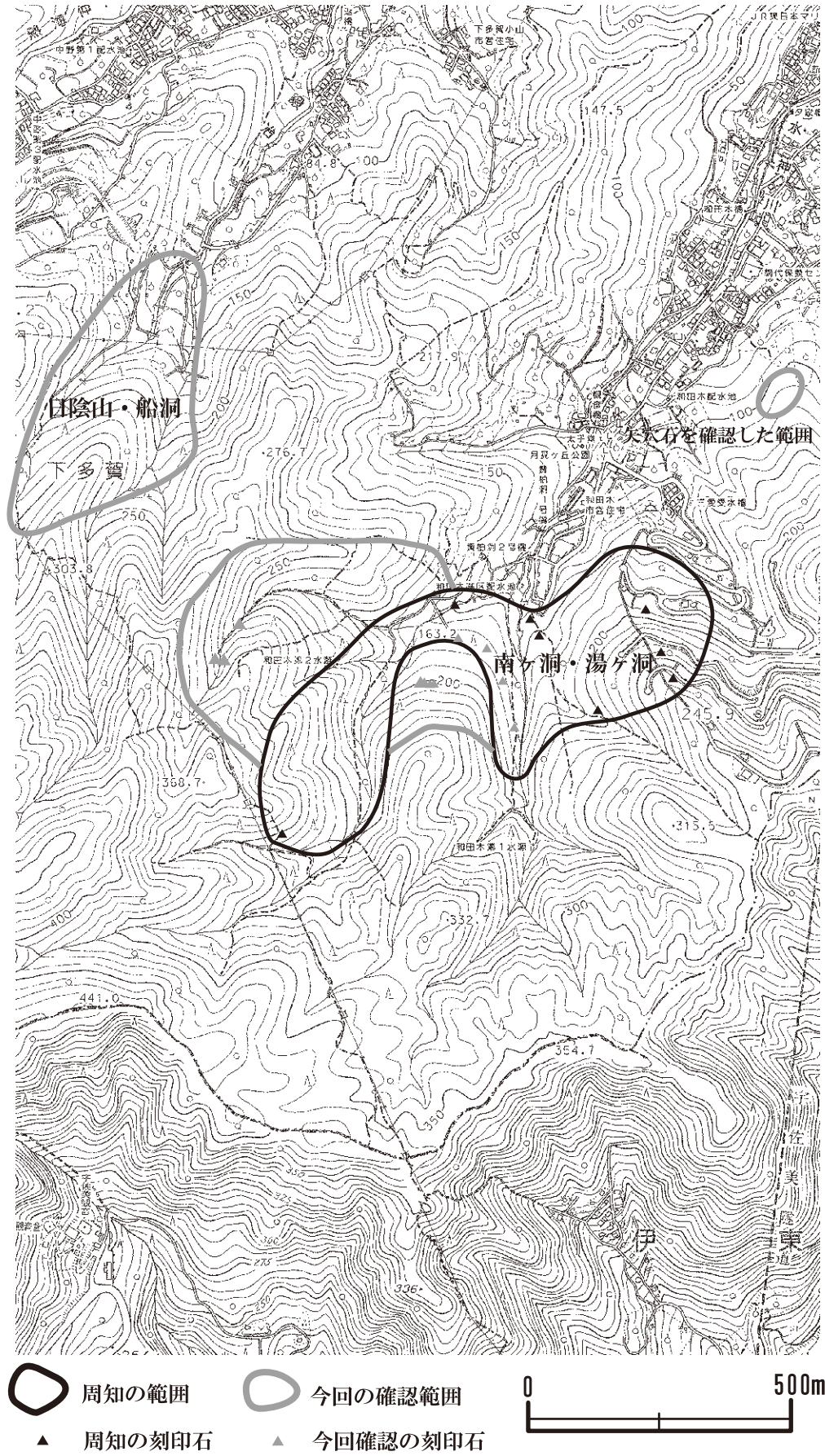
南ヶ洞・湯ヶ洞 刻印



南ヶ洞・湯ヶ洞 刻印



南ヶ洞・湯ヶ洞 刻印

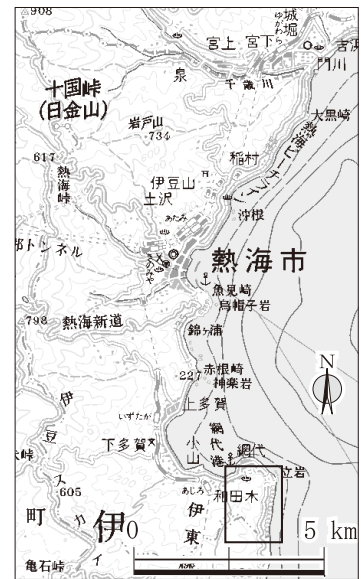


第7図 南ヶ洞・湯ヶ洞石丁場 分布図

8. 朝日山（網代石丁場B遺跡群）

JR網代駅の東方約1.6kmの朝日山公園周辺から伊東市との市境までの国道135号線沿いの海岸付近の石丁場遺跡群を網代B石丁場遺跡群としており、平成20年度の報告で朝日山公園周辺の標高95m～125mの南東斜面に刻印や矢穴石、採石坑を確認し、分布図を作成した。

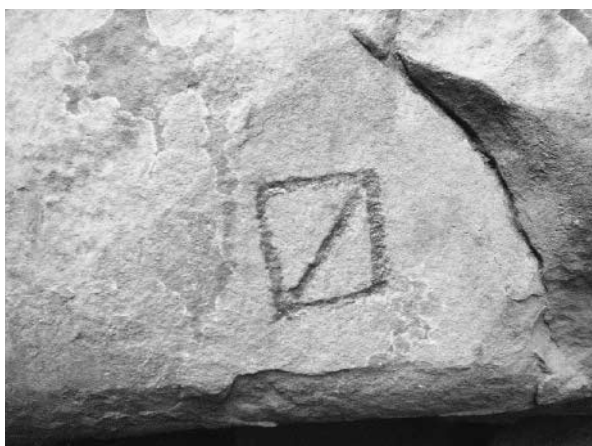
今回の分布調査によって公園の北西側斜面においても「㊦」の刻印が2点確認できた。『間間家文書』に「御石ニ㊦印 黒田様御町場内田由左衛門預り」とあることから黒田家より預かっていた石丁場であると考えられるが、㊦の刻印は伊東市洞ノ入Iなどでも確認できることから検討を要する。また、網代長谷観音の南西となる斜面に「㊧」「㊨」の2種類の刻印が新たに確認することができた。



朝日山 刻印①



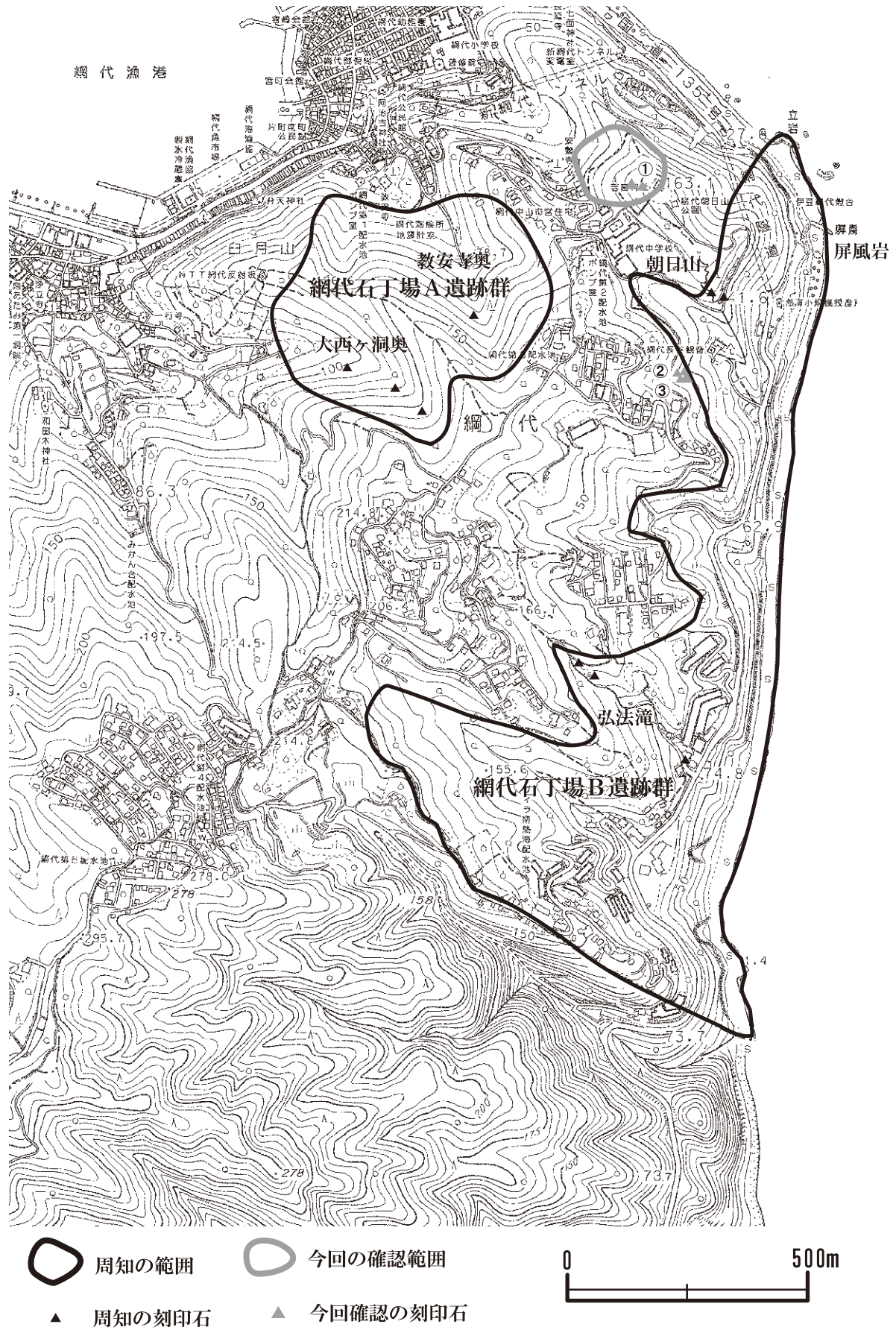
朝日山 矢穴



朝日山 刻印②



朝日山 刻印③



第8図 朝日山石丁場 分布図

第三章 中張窪・瘤木石丁場詳細分布調査

中張窪・瘤木石丁場遺跡は下多賀神社の北西約1.3kmの上多賀と下多賀の大字境となる標高371.2mの山（通称大久保山、中張窪山）の南東側斜面を中心に広がる市内最大規模の石丁場遺跡群である。北側の上多賀に石を運び出す丁場群を白子・地獄沢とし、南の下多賀側を中張窪・瘤木としている。

昭和56年（1981）に「瘤木遺跡」として登録され、平成9年には県道82号線拡幅工事のために発掘調査された。その後に遺跡が字中張窪を中心に広がっていることが確認されたため、平成18年に「中張窪・瘤木石丁場遺跡」と遺跡の名称と範囲の変更を行なった。平成18・19年度に測量とトレンチによる確認調査を行なった際に、鉄製品22点、土製品1点を表採した。鉄製品の内訳は1点が完形の鉄鉗、21点が鉄滓である。土製品は羽口の一部であると考えられる。

今回詳細分布調査を行なった範囲は約20万㎡であり、文字も含む多種の刻印群や石材、クレータ状の窪地となる採石坑が多く確認できた。標高300mあたりまでは開墾による畑の造成や間地石の採石も行なわれ、間知石採石地では採石坑内に多量のフレイク状端材石が確認できるが、それ以上には確認できず、築城石採石時の遺構が良好に残されている。それより低くなるとその後開墾による畑の造成や間知石の採石の痕跡が確認できる。間知石については「多賀間地（知）」と安政三年（1856）に江戸へ入津した船の積荷書上である『重宝録』に項目中の最大数の年間平均10万5千500本と記録されることから、この地で大量の採石が行なわれたと考えられ、その痕跡の一部であると考えられる。

遺跡内で確認できる石材の母岩となる自然石は、長軸2～3m程とやや小さめである。矢穴痕を有する石材は遺跡内に散在しており、最大で矢穴口長軸15cmから大小様々な矢穴列痕が確認でき、ヤバトリの痕跡を確認できる資料もある。

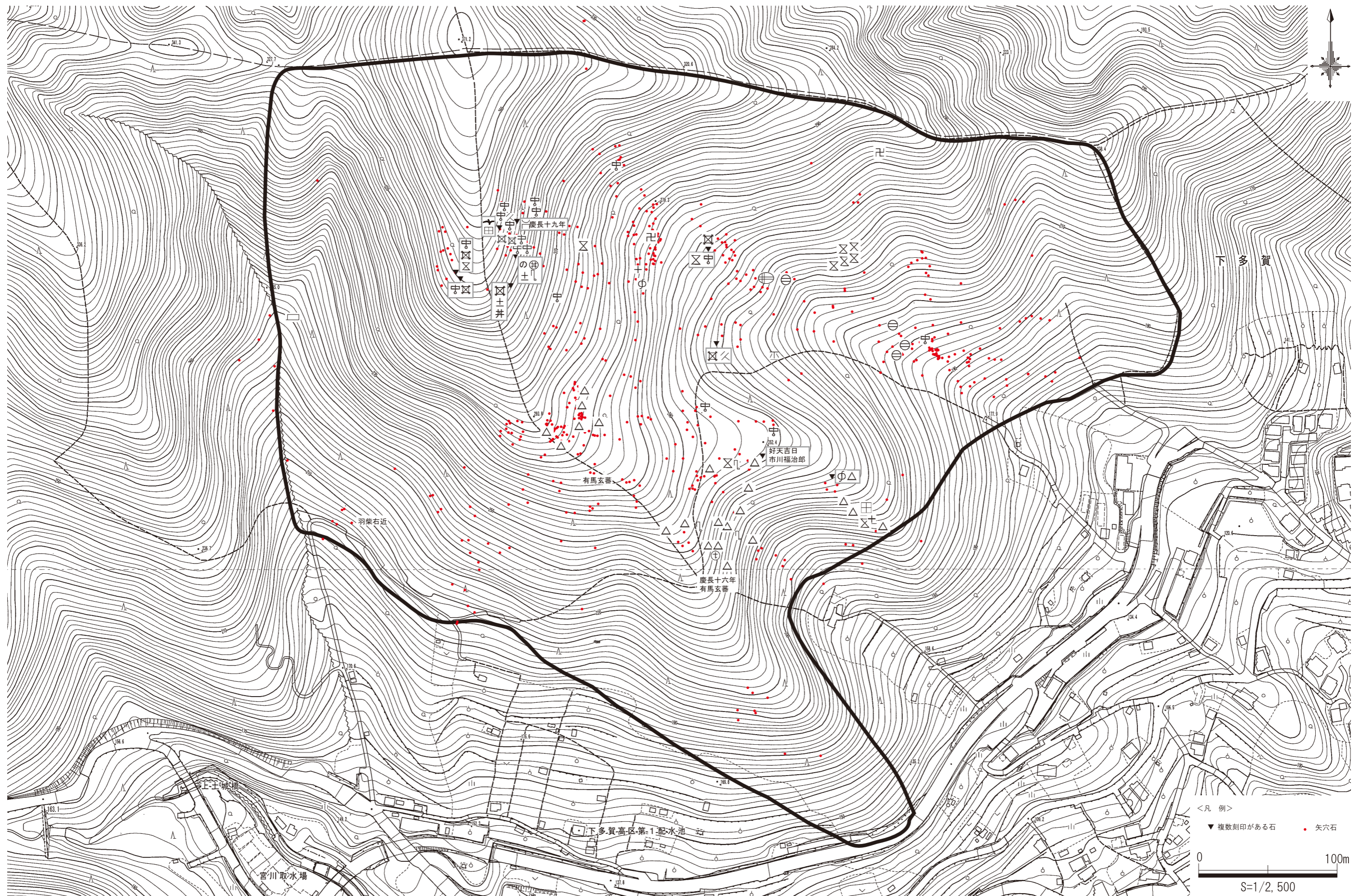
人名刻印は、新たに確認した「有馬玄蕃 石場 慶十六」と「是ヨりにし 有馬玄蕃 石場 慶長十六年 七月廿一日」、「羽柴右近」が2つ、「浅野紀伊守内 左衛門佐」で計5つとなり、「慶長十九年」の刻文もあって、伊豆石丁場遺跡群の中で最も集中して確認できる石丁場である。

これらの石の位置関係については、国道脇に移設された「羽柴右近」の原位置が、遺跡内に現存する「羽柴右近」から谷筋の降っていく先の尾根に位置することになり、二つの刻文石が谷尾根筋で並ぶ位置にある。一方、「是ヨりにし…」「有馬玄蕃…」「慶長十九年」については尾根筋に並ぶように存在する。これらによって「羽柴右近」の森家と「有馬玄蕃」の有馬家の石丁場の境界ラインが複数の石で表されていたと考えられる。

前回の報告書でも有馬家の石丁場の境界ラインとなる尾根筋を境にして、西側の羽柴右近刻印石までの間は刻印が確認できないエリアとなることを指摘したが、採石域の最上部に近い標高340m付近の前回E地区以外では詳細な分布調査によっても、このエリアでは矢穴痕を有する石材や採石坑は多数確認できるものの刻印については確認することができなかった。

No.	X座標	Y座標	刻 印	No.	X座標	Y座標	備 考
1	-104783.443	50796.198	中 ㄨ ㄨ	40	-104898.304	50887.887	△
2	-104788.756	50799.421	中 ㄨ	41	-104881.439	50889.490	△
3	-104689.686	51090.906	ㄩ	42	-104872.004	50890.502	△
4	-104803.026	51105.922	中	43	-104971.012	50973.437	ㄩ
5	-104829.191	51125.371	φ	44	-104942.871	51013.139	△
6	-104736.613	50833.186	慶長十九年 ㄩ	45	-104966.480	50995.787	△
7	-104767.446	50841.113	中	46	-104995.128	50992.121	△
8	-104764.179	50835.748	⊕ の 土 ㄩ	47	-104988.722	50986.029	△ ⊕
9	-104771.103	50848.431	中	48	-104955.529	51003.479	△ φ
10	-104750.133	50834.605	中	49	-104963.900	50988.753	△
11	-104754.900	50836.329	ㄨ	50	-104957.284	50981.747	△ ㄩ
12	-104764.522	50835.015	ㄨ	51	-104967.666	51108.456	△ φ
13	-104731.686	50854.596	中	52	-104957.273	51088.024	ㄨ
14	-104704.908	50915.109	中	53	-104949.172	51081.897	△
15	-104763.814	50889.947	ㄨ	54	-104920.393	50999.025	ㄨ
16	-104802.589	50871.843	中	55	-104891.371	50898.820	△
17	-104782.097	50932.240	+	56	-104796.657	50841.428	井 土 ㄨ
18	-104792.439	50934.401	φ	57	-104740.004	50821.954	出 ㄩ
19	-104765.925	50947.658	ㄩ	58	-104739.204	50832.745	中
20	-104788.335	51039.944	⊖	59	-104739.216	50830.616	中
21	-104772.541	50987.858	中	60	-104740.233	50830.622	久
22	-104886.327	50984.204	中	61	-104734.163	50830.487	中
23	-104901.909	51031.002	中	62	-104738.168	50852.656	中
24	-104930.727	50985.061	ㄩ	63	-104772.511	50794.921	文字判読不明
25	-104929.355	51016.560	△	64	-104924.648	51004.041	ㄩ
26	-104927.118	51019.741	好天吉日 市川福治郎	65	-104968.468	50965.541	△
27	-104935.160	51074.799	φ △	66	-104936.130	50901.655	有馬玄蕃石場 慶十六
28	-104836.353	50989.103	ㄨ 久	67	-104834.571	51141.918	中
29	-104980.848	51005.446	ㄩ	68	-104837.941	51129.013	⊖
30	-104982.425	51015.464	△	69	-104849.287	51116.914	⊖
31	-104969.202	51098.430	+	70	-104772.092	51088.289	ㄨ
32	-104961.274	51099.906	出	71	-104771.434	51083.285	ㄨ
33	-104983.355	50981.437	△	72	-104770.915	51083.004	ㄨ
34	-105012.217	50978.102	是ヨリにし有馬玄蕃石場 慶長十六年七月廿一日	73	-104771.716	51082.894	ㄨ
35	-104901.706	50863.680	△	74	-104773.314	51082.280	ㄨ
36	-104910.583	50874.348	△	75	-104845.166	51033.117	ㄩ
37	-104963.144	50727.110	羽柴右近	76	-104762.971	50979.898	ㄨ
38	-104819.230	50672.765	□	77	-104787.500	51023.975	⊕
39	-104975.937	50952.508	△				

表2 中張窪・瘤木遺跡刻印一覧



第9図 中張窪・瘤木石丁場遺跡 採石坑・刻印・矢穴石分布図

第IV章 総括－調査成果と今後の展望－

1 節 調査の成果

分布調査では新たに土沢山、弁慶嵐、船洞石丁場を確認し、礼拝堂、白子・地獄沢、南ヶ洞・湯ヶ洞、朝日山石丁場については範囲が広がり、前回の調査報告と合わせて計30地点の石丁場遺跡を確認したことになる。

刻印については、特に従来周知の範囲を大幅に広げることになった白子・地獄沢遺跡等で多種多数の刻印を確認し、市内全体で100種類以上の刻印を確認することができた。

また、詳細分布調査を行なった多賀地区の中張窪・瘤木石丁場遺跡では矢穴、刻印石の分布等を調査し、遺跡の残存状況などを把握することができた。その結果、石丁場の境界ラインが複数の人名刻印石で表されていたと考えられること、それによって有馬家の丁場と示されるエリアでは矢穴石やクレータ状の窪地となる採石坑など採石の痕跡は認められるが、詳細な調査によっても刻印が確認できず、その東側の刻印が多種多数確認できる区域と明らかに異なることなどが確認できた。

今回の調査では文献調査は行なわなかったが『福岡県史 近世史料編福岡藩初期(上)』に翻刻された「伊藤二郎兵衛他二名連署状」の中に「一 其元ニ居申百人之内、網代、新釜之石番七人被置之由候、ちと過申候間、網代ニ壱人、新釜ニ壱人、四組与替可被置候事」という文書を確認したことによって、「新釜」は下多賀集落の中心となる下多賀神社が所在する字新釜と考えられ、下多賀と「網代」に石番を置いていたことが確認できた。

前回の報告で朝日山石丁場の刻印「㊦」は『聞間家文書』に「御石ニ㊦印 黒田様御町場 内田由左衛門預り」とあることから黒田家から「石場預り」を行なっていることを指摘したが、大名家側からも関連する史料が確認できたことの意味は大きい。ただし、石番を置くことと石場預かりは同じではなく、刻印「㊦」は伊東市内でも確認されることもあり今後も検討を要する。

次に、今回までの成果をもとに現在市内で確認できる石丁場遺跡について刻印の多寡や種類によって評価表を作成した(表4)。中張窪・瘤木石丁場遺跡は人名刻印の存在だけでなく、刻印の種類、数とも圧倒的に多く、隣接の白子・地獄沢がそれに匹敵する。他の礼拝堂、南ヶ洞・湯ヶ洞といった人名刻印がある石丁場でも、刻印の数が多く、採石坑など遺構が比較的よく残っている。また、朝日山では人名刻印はないが遺構が比較的よく残り、前述のように史料と対応する刻印が存在することが評価できる。

2 節 今後の展望

分布調査については前回の報告でも述べたが、刻印は季節・天候によって視認性に差があって、数回にわたり踏査したところでも新たに刻印を発見することがあり、今後も調査で追加・修正し、詳細な分布図を作成していきたい。

また、土沢山、弁慶嵐石丁場遺跡は砂防工事の開発事業計画の照会がきっかけになって発見された。今後、こうした未周知の山間部での土木工事に対して注意を払うとともに、これまで以上に行政間や事業者と連携をとっていく必要がある。

特に良好な状態で残された遺跡については、優先的に詳細な分布調査、場合によっては保存目的の発掘調査を行なっていくとともに、史跡指定等の保護措置を講じていくこととしたい。

前回からの課題として、採石遺構、石材のデータの台帳作成や石工道具調査と石工やそれにまつわる

伝承等の聞き取り調査については今回も未着手であった。

地質学的・岩石学的調査も本報告では行なわなかったが、産地である各地の伊豆石丁場のデータと消費地の江戸遺跡出土石材データの集積、比較検討のため、サンプルデータの収集に努めたい。

また、下多賀地区には「雁木石」「玄蕃屋敷」「修理屋敷」などの石丁場に関係するような地名が残り、船積伝承地も残る。石丁場遺跡は採石場という生産遺跡であるが、そのみで単独で機能したものではなく、運搬、検品、積出やそれを支えた労働者、地域社会があって存在したものである。遺跡として確認できないそれらの要素についても何らかの形で評価して、全体像を伝えていくことが重要であると考えられる。今後の史跡としての保存活用の中で議論していきたい。

今回の調査では前回の課題を積み残したのも多く反省すべき点が多いが、市内全体の石丁場の大枠での把握ができたこと、それぞれの石丁場遺跡の特徴をまとめて今後保存の優先順位などの基本的な方針を得るための整理をすることができたことなどは一定の進展といえよう。伊豆石丁場遺跡群は西相模から伊豆半島全体に広がる広大な遺跡で熱海市域はその一部であり、全体像の把握には調査の継続と資料の蓄積が不可欠となる。考古学を中心とした学際的な総合調査を長期にわたって地道に確実に継続していく必要があり、今後も伊豆石丁場遺跡が存在する自治体、および消費地である都市遺跡を持つ自治体、さらには市民と連携して取り組んでいきたい。

名称	土地の状況	刻印			矢穴石	採石坑	史料、絵図等の有無・特記事項	評価	
		人名	種類	量					
泉	1 嶽山	山林・畑地	×	×	×	×	×	1に嶽山石丁場、2に石材と「伊豆石此邊より出ル」という記述	E
	2 奥平沢	山林	×	×	×	×	×	1に奥平沢丁場	E
	3 黒崎海岸	海岸	×	×	×	△	×	3に鍋島殿（慶長～元和）岡部内膳・尾張様（寛永六年）、4に絵図あり	D
	4 大洞Ⅰ	山林	×	×	×	△	△	5の大洞近辺に「石場」	D
伊豆山	5 大洞Ⅱ	山林	×	△	△	△	△	5の大洞近辺に「石場」	C
	6 稲村	山林・海岸	×	△	○	○	×	3に京極丹後（寛永六年）の記載、京極家と考えられる刻印	C
	7 礼拝堂	山林	△	○	◎	○	△	京極家と考えられる刻印、紀年「慶長九年」あり	B
	8 岸谷	集落内	×	△	△	×	×	道路脇に刻印1点のみ	D
熱海	9 東海岸	山林	×	×	×	△	×	市街地の一部に残る	E
	10 来宮神社	境内地	×	×	×	△	×		E
	11 熱海梅園	公園	×	×	×	△	×		E
	12 土沢山	山林	×	△	△	△	△		D
多賀	13 曾我浦	私有地、山林	×	×	×	×	△	6などに「青がんぎ」「青石」記載近代の採石、道路工事等で消滅？	D
	14 白石	私有地、海岸	×	×	×	×	△	6に「白石」記載、近代の採石、土木工事等で消滅？	D
	15 上多賀北部	山林・公園	×	△	△	△	△		D
	16 上多賀海岸	海岸	×	×	×	×	△	道路工事等で消滅？	E
	17 白子・地獄沢	山林	×	◎	◎	◎	◎	3に「熊かとう」福島正則（慶長～元和）、尾張藩（寛永六年）の丁場	B
	18 中張窪・瘤木	山林	○	◎	◎	◎	◎	有馬、森、浅野の大名刻文、紀年銘「慶長」3点あり。	A
	19 中野海岸	海岸	×	×	×	○	×	道路工事等で消滅？	D
	20 小山海岸	海岸	×	△	○	△	×		D
	21 弁慶嵐	山林	×	△	△	△	×	砂防工事等で消滅？	D
	22 日陰山・船洞	山林	×	△	△	△	×		D
	23 南ヶ洞・湯ヶ洞	山林	△	◎	◎	◎	○	京極丹後守の刻文あり	B
網代	24 大西ヶ洞奥	山林	×	△	△	○	○	3に「大西かほら」加藤肥後守（慶長～元和）、北条出羽守（寛永六年）、細川忠興（寛永十二年）の石丁場	C
	25 教安寺奥	山林	×	△	△	△	△	3に「教安寺谷」加藤肥後守（慶長～元和）、北条出羽守（寛永六年）、細川忠興（寛永十二年）の石丁場	C
	26 朝日山	山林・公園	×	△	◎	◎	◎	7に石場預	B
	27 弘法滝	山林	×	△	○	△	×	3に「網代村」大村民部（慶長～元和）、大村の刻印	C
	28 屏風岩	海岸	×	×	×	△	×		E
初島	29 下古路山	山林・海岸	×	△	△	○	△		C
	30 松崎山	山林・海岸	×	×	×	△	×		E

凡例

刻印・矢穴石・採掘坑を確認した数：×0点 △1点～4点 ○5～9点 ◎10点以上

評価：刻印・矢穴石・採掘坑の×△○○を ×0点 △1点 ○2点 ◎3点として、文献か絵図がある場合は1点加算して集計 A14点以上 B9～13点 C5～8点 D2～4点 E1点以下

文献：1伊豆山神社古文書 2熱海道之記 3細川家史料 4足柄下郡土肥村石丁場御石預り証文并付図 5走湯山境内図 6岡本家文書 7間間家文書

表4 熱海市内石丁場遺跡評価

引用参考文献

- 熱海市1967『熱海市史』上巻
熱海市1972『熱海市史』資料編
熱海市教育委員会編1989『下多賀神社水浴せ式』
熱海市教育委員会編1997『瘤木石丁場遺跡』
熱海市教育委員会編2009『熱海市内伊豆石丁場遺跡確認調査報告書』
石川県金沢城調査研究所編2008『戸室石切丁場確認調査報告書』Ⅰ
石川県金沢城調査研究所編2013『戸室石切丁場確認調査報告書』Ⅱ
伊東市教育委員会編2010『静岡県伊東市伊豆石丁場遺跡確認調査報告書』
伊東市教育委員会編2014『静岡県伊東市伊豆石丁場遺跡確認調査報告書』Ⅱ
大高吟之助1972『郷土多賀村史』
大高吟之助1974『網代郷土史』
加藤清志1994「火山の国に住んで」『ほっといず』第49号他連載コラム
金子浩之・杉山宏生2003「江戸城の石切丁場」『石垣普請の風景を読む』
北垣聰一郎1971「近世城郭における石垣符号の一考察」『関西城郭研究会』No.72
北垣聰一郎1987『ものと人間の文化史58石垣普請』法政大学出版局
北原糸子1995「第7章 伊豆石丁場と都市江戸の構築」『江戸城外堀跡 赤坂御門・喰違土橋—地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書3—』
北原糸子1999『江戸城外堀物語』ちくま新書
朽木四郎1978「城石垣の符号」『探訪日本の城』別巻築城の歴史 小学館
栗木崇2010「熱海市内の石丁場遺跡について」『江戸城・城下と伊豆石』
栗木崇2013「近現代の技術から見直す採石遺跡」『歴博映像フォーラム8「石を切る—採石技術の伝統と革新—』
齋藤慎一2003「関東・山梨における織豊期城郭研究10年の現状と課題」『織豊城郭』第10号
静岡県埋蔵文化財センター編2013『弁慶嵐石丁場遺跡』
白峰旬2003『豊臣の城・徳川の城—戦争・政治と城郭』
白峰旬2009「全国穴太・石垣関連史料Ⅱ」『金沢城研究』第7号 石川県金沢城調査研究所
白峰旬2012「慶長11年の江戸城普請における加藤清正の石材調達指図について—「吉村文書」の内容分析から—」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
鈴木茂1981「江戸城と伊豆石」1～5『伊豆新聞』連載コラム
田端寶作1967～1992「熱海地区」(調査記録ノート)
野中和夫2007『石垣が語る江戸城』同成社
福岡県1982『福岡県史 近世史料編福岡藩初期(上)』
藤井重夫1982「大阪城石垣符号について」『大阪城の諸研究』名著出版
山田いと・木村博1996『多賀民俗誌—静岡県熱海市—』城ヶ崎文化資料館

報告書抄録

ふりがな	あたみしないいずいしちょうばいせきかくにんちょうさほうこくしょⅡ						
書名	熱海市内伊豆石丁場遺跡確認調査報告書Ⅱ						
副書名	熱海市文化財調査報告						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集著者名	栗木崇						
編集機関	熱海市教育委員会						
所在地	〒413-8550 静岡県熱海市中央町1-1						
発行年月日	西暦2015年3月31日						
ふりがな 所収遺跡群名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
あたみしない 熱海市内 いずいしちょうば 伊豆石丁場 遺跡群	しずおかけん 静岡県 あたみし 熱海市 しもたが 下多賀 ちゅうばりくぼ 字中張窪他	22205	—	世界測地系 35° 03' 130"	139° 03' 516"	20090401~ 20150331	学術調査
所収石丁場遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
稲村 礼拝堂 土沢山 白子・地獄沢 中張窪・瘤木 弁慶嵐 日陰山・船洞 南ヶ洞・湯ヶ洞 朝日山	石丁場 (採石場)	近世	採石遺構 矢穴石 刻印石				
要 約	熱海市内伊豆石丁場の分布調査の結果、平成20年度の報告と合わせて30地点の石丁場、約100種類以上の刻印を確認。 中張窪・瘤木遺跡石丁場において詳細分布調査実施。						

－熱海市文化財調査報告－

熱海市内伊豆石丁場遺跡確認調査報告書Ⅱ

平成 27 年 3 月 31 日発行

編集・発行 熱海市教育委員会

〒413-8550

静岡県熱海市中央町 1 - 1

電話 0557-86-6234

E-mail bunkakoryu@city.atami.shizuoka.jp

<http://www.city.atami.shizuoka.jp>

印刷 みどり美術印刷株式会社

